

委員会としての学び

- 委員会としてセミナー中にPYが投げかけた質問を記録するとともに、セミナー中に発表されなかった質問も記録することが重要であるということ話し合った。
- 少人数のグループディスカッションは効率が良く、好評だった。
- 失敗を怖れるより、行動したほうがよい。
- PYの中にはリーダーシップをとることにに対して積極的な考えを持っている人もそうではない人もいるが、委員会としてどちらの考え方も考慮に入れる必要がある。
- 一対一のインタビューを行い経験を共有することで、互いの内にあるリーダーシップの能力を伸ばすことにつながる。
- 前から、横から、そして後ろからのリーダーシップという考え方は、このセッションの中で最も興味深い概念であった。そして、私たちはそれぞれのカテゴリーに属するかを認識することができた。
- 「全ての人がリーダーである」ということを学んだ。

アドバイザーからのコメント

このセミナーのテーマは「いかに自分の力を引き出すか」とした。なぜ最初のセミナーのテーマとしてこれを選んだかという、リーダーシップとは自分から始まるものだと私が信じているからだ。英語には人が自分の人生を生きることを“leading one's life”すなわち「自分の人生をリードする」という表現があるが、これは人が意味のある人生を生きるためには、まず自分の人生をリードしなければならないということを示唆している。私がセミナーの中で人が自分の「人生の目的」や「スタンド（信念、拠り所）」を探求し、明確にすることの重要性について語ったのは、リーダーシップを発揮するために源がそこにあると信じているからである。リーダーシップを発揮することはリスクを伴うことである。なぜなら、人がリーダーとして立つことを選ぶ時には住々にして自分の快適ゾーンから出なければならないし、そうすれば失敗することも大いにあり得るからだ。したがって、人がある状況においてリーダーシップを発揮するためには、人からよく見られたり、正しくやるということよりも重要な何かを持っている必要があるわけだ。

しかし、リーダーシップがどこから来るのかについて語る前に、リーダーシップとは何かについて全PYが共通の理解を持てるよう、今日世界中でリーダーシップについての捉え方が変わってきているということについて私は語る必要があった。私が「出番型リーダーシップ」と呼んでいるリーダーシップについての新しい考え方は従来の「責任ある立場に就いてない限りリーダーにはなれない」という考え方に対して「全員がリーダーである」という信念に基づいている。セミナーの中で明確に

説明できなかったかもしれない重要なポイントは、「役割としてのリーダー」と「人としてのリーダー」を私は分けて考えているということだ。したがって、あるチームに「マネジャー」といったリーダーシップをとる役割を持つ人がいたとしても、そのチームの全員をリーダーとして見ることは可能である。特にチームがこれまでに直面したことがないような困難に遭遇し、マネジャー一人で全てを解決することができず、その困難を乗り越えるためには全メンバーが持てる力を全て出し切ることが求められるような場合、このことはとても重要になる。従来の考え方の問題点は、メンバーの間に依存心や当事者意識の欠如を生み出し、結果としてチーム全体のパフォーマンスにも悪い影響を与える傾向があることだ。人類が直面する問題がより複雑かつ大規模になり、変化のスピードがますます速くなっている今、私たちはより多くの人々の力を引き出し、当事者意識を持ったリーダーとして立ち上がることができるような方法を見出さない限り、生き残れないかもしれない。したがって、私にとってリーダーシップの考え方が従来型から出番型にシフトしていくというのは、単に良いアイデアであるだけでなく、私たちが生き残り、繁栄するためには欠かせないことなのである。

こうした考え方、特に「多元型リーダーシップ」という考え方は概ね受け入れられた感じがしている一方で、特にPYにとっていくつかの概念は理解するのが難しかった部分もあったようなので、JPY向けに日本語で補講的なセッションを行うことを検討している。

2 リーダーシップ・セミナー

このセッションの目的

今回のセミナーのテーマは「いかに他者の力を引き出すか」であった。リーダーたる者、しっかりと自分の信念を持っている必要があるが、それと同時に、それぞれが自分の信念を持っている他者と力を合わせ、彼らの持つ力を引き出し、彼らが取り組んでいることについて

最大限の力を発揮できるようになる必要がある。このセミナーでは共通の信念及びアラインメント(共通の信念を見出すプロセス)の紹介を通してPYが他者と互いの力を引き出すような関係を築き、コーチングの紹介を通じて他者の力を引き出す方法を学ぶことを目的とした。

内容

1. チェックイン

初めに、榎本先生より「チェックイン」が紹介された。ここでは意識を自分の内側に向け、自分の心の状態を10段階評価で表現した後、二人組となって今度は言葉を使って自分が感じていることを話し合った。

2. 前回のセミナーからの振り返り

レター・グループを二つに分けた10人程度の小グループごとに、前回のセミナー以来リーダーシップについて学んだことを共有した。PYからは以下のようなコメントが聞かれた。

- 特定の状況に応じて異なる次元のリーダーシップを発揮することが重要である。
- リーダーはチームの一員として、共通の信念及び責任を明確にする役割がある。
- 「あなたを生き生きとさせるものは何ですか」という問いは、PYそれぞれの最も好きなことや楽しいことに目を向けさせてくれ、とても影響力があった。
- リーダーは常に明確な意図を持つことで、より物事を効率的に進めることができるようになる。
- しっかりとした信念を持つことは、自らの信じるものに集中できるようになるためにも重要である。

3. 共通の信念及びアラインメント

アラインメントとは共通の信念を見出すプロセスである。榎本先生はこのことについて、今度の休日にどこに出かけるかについて会話している一組の夫婦の例を用いて説明した。当初、夫は山でハイキングをしたいと主張し、妻は海で泳ぎたいと主張したが、アラインメントのプロセスを通じて、彼らは共に家族が自然の中で楽しい時間を過ごすという共通の信念を持っていることに気付いた。その気付きに基づいて、結果的に彼らは山に出かけ、湖で泳ぐということのできることができた。このように、共通の信念に行き着くためには、お互いの意見や行動の背後にある理由に目を向けなければならない。これについての演習として、PYはキャビンのルームメイトとともに、キャビンでの生活についての共通の信念を見出すべく話し合った。

4. コーチングの基本的な哲学及びスキル

コーチングは他者の力を引き出すことを目的としたコミュニケーションの手法である。コーチングをする上で欠かせないものとして五つの資質が紹介された。榎本先生によるデモンストレーションの後、PYはJPYとOPYという組み合わせの二人組に分かれ、「あなたはどういうリーダーになりたいですか?」というテーマでお互いにコーチングの練習を行った。

主な学び

1. 意識を今ここに持ってくる

セミナーの導入部分で、PYは、自分自身の内面に意識を向けて、自分の頭と心と身体がどのような状態かを確認する「チェックイン」という作業を経験した。この一連の作業を行うことで、人は概して自分が感じていることを自覚し、それを受け入れられるようになることでより自分の意識を今ここに持ってくるができるようになる。自分の意識を今ここに持ってくることでできれば、その人の存在感は他者から見ても分かる

ほど大きくなるため、このことはリーダーにとって特に重要である。

2. 共通の信念とアラインメント

人は誰もその人の意見や行動の元になる個人的な信念を持っている。リーダーとして、グループの中に協力的な雰囲気を生み出すには、これらの個人的な信念が重なる部分はどこかをアラインメントのプロセスを通じて探ることで共通の信念を見出すことが不可欠である。

3. コーチング

良いコーチになるためには、相手がコーチングに持ち込んでくるどんな課題に対しても、本人が自分なりの答えを見出せるようサポートするスキルを学ばなければならない。そのためには、その相手がもともと創造力と才知にあふれ、欠けるところのない存在であると見る必要がある。さらに、コーチングの五つの資質と呼ばれる好奇心、傾聴、自己管理、直感、そして学習と行動といったスキルを身に付ける必要がある。加えて、コーチング

の基本的な流れを習得し、相手が心から望んでいる「ビジョン」を言葉にし、それを実際に手にするためにどんな「選択肢」があるかを探り、最後にまずはどんな「行動」を起こすかを決められるようサポートしなければならない。コーチングは通常継続的に行われるプロセスなので、もう一つのステップとして「振り返り」を行い、その前のセッションで決めた行動を起こしたことで何を学んだかを明らかにする必要がある。

参加青年からのフィードバック

- 今回のリーダーシップ・セミナーを通して、私は大きく二つのことを学んだ。一つは、リーダーシップについて様々な見方があるということ、そして、もう一つは自分を客観的に見る必要があるということである。例えば、リーダーは自覚を持たなければならない、他者を尊重しなければならない、などだ。
- 良いリーダーになるためには指示・命令を行うような従来のリーダー像を目指すのではなく、自分自身を磨いていく必要があると考える。また、コーチングの方法を通し、私は今まで行っていた自分探しの方法が間違っていたことに気が付いた。そして、最近、私は一体どのような人物なのか、あるいは私は何をしたいのかといったことを自分に問いかけるようになった。答えはまだ見付かっていないが、コーチングを通し、自らの思いを言葉にしたことで、私は思ったほど自分のことを客観的に見ておらず、自分の心の声に耳を傾けていなかったことに気が付いた。リーダーシップ・セミナーからはこのような気づきが得られ、リーダーシップについて学ぶだけでなく、自分自身を再発見することができ、とても興味深かった。
- コーチングのスキルは、これからの私たちの人生の中でリーダーシップをとっていく上でも、船上でのプログラムや帰国後の活動においても必要となるものであるため、このセミナーは大変有益だったと考える。現代の世界情勢は複雑さを増しており、もはや一人のリーダーに依存するのではなく、皆がそれぞれの力を発揮し、共通の目的の達成に向けて一つのチームとして力を合わせていくことが大切であると感じている。また、このセミナーのように双方向型のスタイルは多くのPYに自分の考えを共有できる機会を与えるのでとても良かった。
- 個人的には、今回の二回目のリーダーシップ・セミナーにとっても満足している。なぜなら、セッション全体を通じてたくさんの学びがあり、榎本先生は聞き手を常に魅了し続けていたからである。特にコーチングの手法について教えてもらい、コーチングをしたり、

- されたりする経験ができたことがとても良かった。また、このセミナーを通じて、何人かのJPYが大勢の人の前で自分の意見を堂々と主張することができるようになってきている姿がとても印象的であった。全体的に、私はこのリーダーシップ・セミナーに満足しており、他の人たちもこのセミナーは素晴らしいと言っているのを聞いて嬉しかったし、とても楽しかった。
- セミナーで行ったコーチングの練習がとても楽しかったので、リーダーシップ・セミナーの後にコーチングについて興味がわいた。
- リーダーシップ・セミナーは、自分自身に目を向け、自分がどのような信念を持っているかについて考える機会を与えてくれた。特にコーチングについてのレクチャーは面白かった。というのも、私は会話があまり得意ではないと思っていたが、意外とうまくできたので、貴重な経験ができたと感じたからだ。
- 私はリーダーシップ・セミナーに深い感銘を受けた。このセミナーに参加する前までは、リーダーシップとは前から引っ張っていくものだと思っていた。しかし、このセミナーでは、榎本先生が誰にもリーダーシップを発揮するチャンスがあると教えてくれたことで、ようやく自分のリーダーとしての役割を見付けられた気がする。
- コーチングについて多少の知識はあったが、実際に他者に対しコーチングを行うのは初めての経験だったため、今回のセミナーは私にとって大変有益であったと感じている。私は同じグループのバーレーン出身の青年とディスカッションを行ったが、それまではお互いのことについて深く語り合ったことはなく、今回のディスカッションがとても良い機会となった。私は中東の国々にとっても興味があり、彼女の話聞くことができとても嬉しかった。コーチングを行い、他者の歩んできた人生を知るとはとても興味深く、もっと周囲の人が今までどのような道を歩んできたのかを知りたいと感じている。自分自身について語ることは、自分自身を助けてくれることにもつながる。

委員会としての学び

初めに、リーダーシップ委員会の一員として、私たちはアドバイザーである榎本先生のそばで活動することができ、とても光栄に感じている。榎本先生は私たち委員会のメンバーに、レター・グループごとに分かれて行った前回からの振り返りにおいてファシリテーター役を担う機会を与えてくださった。その際、前回のセミナーで教えてくださったとおり、リーダーシップには前からのリーダーシップだけでなく、横からや後ろからのリーダーシップなど様々な次元があることを実際に経験することができた。リーダーシップには決まった一つの定義はなく、それは文化の影響を大きく受けるということを学べたことは大きかった。それ故、特に異なる文化出身の人たちが集まる時には、アラインメントのプロセスを通じて共通の信念を見出すことの重要性を感じることができた。将来のリーダーたちが平和で持続可能な世界を構築するためには、こうしたやり方について更に研鑽

を積む必要があると感じた。コーチングについて学んだことは、それを効果的に行うことができれば私たちが持てる可能性を發揮する上でとても役立つと思われる。コーチングのスキルは私たちが本当に望んでいるものを手にできるよう勇気付けてくれるので、決して過小評価されるべきではない。多くの人はただその熱意に火をつけてくれる、このようなちょっとしたサポートを必要としているのだ。私たちは誰もコーチングを受け、また他者に対してコーチングを行う必要がある。そうすることで、世界が直面している様々な問題に対応できるようなリーダーをたくさん育てることができるだろう。最後に、このようにPYが委員としてセミナーへ関わることができるような仕組みを用意してくれた方々へ感謝の意を表したい。私たちはこの仕組みを大変気に入っており、委員会のメンバーとしてここまで学んだ全てのことを大事にしたいと思っている。

アドバイザーからのコメント

このセミナーのテーマは「いかに他者の力を引き出すか」であった。リーダーが自分一人では実現できないことを実現するためには、必然的に他者と力を合わせる必要がある。その際、活動を共にする人たちに対して何をすべきか指示をするよりも、彼らが自分たちの持てる力を最大限に發揮できるよう支援する方法を知っていた方がより効果的である。このことは、私が最初のセミナーで述べた「リーダーシップのパラダイム・シフト」の中の、特に「強制すること」から「巻き込むこと」へのシフトと関係している。どうやって他者の力を引き出すかを心得ているリーダーと共に活動する人たちは、自分たちがやっていることに對して自ら進んで自発的に取り組む傾向がある。

このセミナーの前半では、集団的なスタンド及びアラインメントという概念について紹介した。アラインメントとは、関係者全員の個人的なスタンドが重なる部分を見出すプロセスであり、その重なる部分こそが集団的なスタンドである。このプロセスを通して、何かを一緒に成し遂げようとしている人たちが互いの力を引き出し合えるような関係性を築くことが可能になる。私はここで同じキャビンのルームメイトになった人たち同士でそれぞれの集団的なスタンドを見出すための会話をしてもらうことにした。というのも、ちょうど船での生活が始まったばかりのタイミングだったこともあり、キャビンでの生活についてどんなスタンドで臨むかについて話すことが役に立つのではないかと考えたからである。総じて、PYたちはこのことについて話し合えたことを前向きにとらえたようであった。

このセミナーの後半では、他者の力を引き出すことを目的としたコミュニケーション手法であるコーチングの基本的な哲学及びスキルについて紹介した。時間が限られていたため、たくさんの説明をするよりも、一人のPYに対してコーチングのデモンストレーションをすることにした。200人を超える人たちの前でたったの10分という短い時間でこのデモンストレーションを行うのは私にとっても相手のPYにとっても大きなチャレンジではあったが、その後それを見ていたPYたちが私の関わり方を見て感じたことをシェアしてくれたのを聞くと、彼らがコーチングと普通の会話がどう違うかについて概ね理解してくれたと感じた。最後に、私はコーチングについての重要なポイントを「五つの資質」そして「コーチングの基本的な流れ」を用いてまとめた。

最後にもう一つここで述べたいのは、このセミナーの初めに振り返りの時間をもち、それをリーダーシップ委員会のメンバーにファシリテートしてもらったことである。彼らの主な役割は、前回のセミナー以来自分のリーダーシップについて何を学んだかについて小グループの全員がシェアできるように時間を管理することであった。PYたちが自分が学んだことをしっかり腑に落ちるようになるということ以外に、私がこのようなやり方をした意図は、委員会のメンバーがグループのファシリテーションを通してリーダーシップを發揮できる機会を提供することであった。彼らにファシリテーションをしてみてもうどうだったかを聞いたところ、総じて役に立つ経験であったようだ。

3 リーダーシップ・セミナー

このセッションの目的

第三回目のセッションのテーマは、「いかに世界の力を引き出すか？」であった。効果的なグローバル・リーダーになるためには、高いレベルの世界認識と責任感が必要である。そこで、このセミナーでは、PYの世界認識と

責任感を高めることをねらいとし、そのために彼らが世界に対して感じている痛みや情熱を感じ、その二つをつなげることで彼らがグローバル・リーダーとしてどんな役割を果たし得るのかに気付くことを促すこととした。

内容

榎本先生はPYたちを二人組に分け、お互いに「あなたはどんなことに情熱を感じますか？」という問いを投げかけるところからこのセミナーを始めた。そして、続けて前回のセミナーの振り返りを行った。PYは無作為に20のグループに分けられ、リーダーシップ委員会のメンバーが各グループのタイムキーパー及びファシリテーションを行った。PYは以下の問いについて振り返った。すなわち、「前回のリーダーシップ・セミナー以来、リーダーシップについて、特にお互いの力が発揮されるような関係を作ったり、相手の力を引き出したことについてどんなことを学びましたか？」という問いである。

このセミナーの概要を紹介した後、榎本先生はPYに対して「世界のチェックイン」という短いエクササイズを行った。ここでは、全てのPYが以下の二つの問いに対して10段階評価で答えることを求められた。すなわち、「今日、私たちの世界が直面している問題の大きさはどれくらいだと思いますか？」と「今日、私たちの世界が直面している問題に対する私たちの反応の大きさはどれくらいだと思いますか？」の二つである。全体的にPYの答えは問題の方がそれに対する反応よりもずっと大きいというものだった。榎本先生はそれを受けて、この差を埋めるためには高いレベルの世界認識と責任感を持ったリーダーがたくさん必要になると述べた。

世界認識と責任感を高めるために、PYは二人組になって交互に未完成である三つの文章を完成させるとい

うエクササイズを行った。例えば、最初の文章は「今、私たちの世界で起きていることを考えた時、私にとって気がかりなのは・・・」という形で始まり、二人組の片方のPYがこれを聞いた時に自分の中から自然に湧いてきたことを口にするのでその文章を続けていくよう求められた。その後、榎本先生は世界認識及び責任感を高める上で痛みが果たし得る役割について説明した。

休憩の後、榎本先生は3Pモデルというものを紹介した。3Pモデルは、三つの部分から成っている。すなわち、情熱(passion)、痛み(pain)、そして存在意義(purpose)の三つである。榎本先生は多くの人が自らの情熱と痛みが交差するところに存在意義を見出していることを説明した。このことをPYに少しでも実感してもらうべく、再び二人組のエクササイズを行った。まずはA4の紙を三つ折りにし、その一番左に情熱、一番右に痛みを各自書き出した。そして次に、情熱の欄に書かれたものと痛みの欄に書かれたものを何らかの形で結び付けられるかに挑戦した。

3Pモデルのエクササイズを通じて見出したことをまとめるために、PYは以下の文章を完成させるよう促された。すなわち、「私の役割は、私の_____（情熱）をいかして、_____（痛み）に取り組むことです。」その後、PYはレター・グループごとに集まり、自分独自の役割について気付いたことをグループのメンバーに向けて宣言した。

主な学び

PYたちは「いかに世界の力を引き出すか」というテーマに関して、いくつか大事なことを学んだ。

- グローバル・リーダーとは、自らが属する世界で何が起きているかを認識していて、かつそれらの問題に対して何かをしようとする人たちのことを指す。
- 世界に対する認識と責任感を高める上で自らが感じる痛みが役に立つ。

- 3Pモデルに示されるように、人は自らが情熱を感じることで痛みを感じることに存在意義を見出す傾向がある。
- 全てのリーダーには自らが属する世界で果たし得るその人特有の役割がある。

参加青年からのフィードバック

- 情熱と痛みを結び付けるエクササイズが良かった。それをすることで、自分たちの中にあるものにより焦点を当て、世界で起こっている問題に対してどのような役割を果たし得るかを見出す助けにもなった。また、いつもの表面的な会話の代わりに、お互いの深い考えについて話し合えたことが良かった。
- リーダーシップ・セミナーは、私にとって非常に興味のあるものだった。その理由としては、新しいタイプのリーダーシップがあり、違う国のリーダーシップ像を聞くことができたからである。もちろん日本は、本心を言うことよりも周りに意見を合わせたり、年長者の言うことに従ったりするといったこれまでの伝統的なリーダーシップ像を変えていくべきであるが、日本は変われると確信していると同時に、そのような変化を見られることを楽しみにしている。
- 今回のセミナーの目標は明確で、よく練られていたので、楽しかった。
- 今回のセミナーはとても面白く、すばらしかった。このセミナーのお陰で、世界をこれまでよりも少し生き生きとした見方で見始めることができるようになったと同時に、自分にも世界を良くするために何かできるのではないかという希望も湧いてきた。
- お互いの気持ちや考えを共有できた。私たちは、非常に根本的なレベルでつながっているので、気持ちや考えを共有することは異文化理解を促進する際に非常に有益である。
- 今回のセミナーはとても面白く、有益だった。私たちには世界を変える力や強さがあるということに気付けたからである。だからこそ、リーダーシップという感覚がスムーズに私の中に入って来た。

委員会としての学び

- 委員会のメンバーとして、全ての人がリーダーであるということ覚えておくことが重要であった。
- PYはエクササイズに取り組んだり、グループに分かれてディスカッションしたりすることを好むことが分かった。常に講義を聞かされることはあまり効果的ではない。
- PYの中には行動を起こすことを恐れる人もいるが、失敗を恐れることよりも行動を起こすの方が重要である。
- PYからフィードバックをもらうことは重要である。なぜなら、そうすることで、セミナーやコースの質を向上させる助けになるからである。
- セミナーの中でPYがした全ての質問を記録しておくことが重要である。また、セミナーの中で聞くことができなかった質問についても何らかの方法で集めることも重要だと改めて感じた。

アドバイザーからのコメント

3回目のセミナーのテーマは「いかに世界の力を引き出すか」とした。私は、グローバル・リーダーというのは自分が属する世界で何が起きているかを認識していて、かつそれについて自分たちが何かできることがあると知っている人たちだと信じている。したがって、グローバル・リーダーになるためには、世界認識と責任感を高めることが不可欠である。今、世界が直面している問題がどれくらい大きいかを尋ねたら、大概の人は世界で起きていることに気付いているということが分かる。そうした問題を政治家や科学者たちの手に委ねるのではなく、自分たちの世界については自分たちで責任を持って面倒を見られるよう、自分自身の力を引き出さなければならぬ。

私は長年の経験から、人が自分の力を引き出したり、責任感を高めたりする上で、彼らが世界で起きていることに対してどんな痛みを感じているかということがその出発点になることを学んだ。なぜなら、そうした

痛みの奥には慈悲の心があり、それは彼らがそうした問題について心から気にしていることの表れであり、その慈悲の心からこそ行動を起こす意思が芽生えるからである。さらに、多くのリーダーは自分たちの情熱だけでなく、痛みに従うことによって自分たちがリーダーシップを発揮する分野を見つけたことに私は気付いた。その気付きに基づいて作ったのが「3Pモデル」であり、それを紹介した後、PYそれぞれがこの世界でどんな役割を果たし得るかを少しでも垣間見られるようエクササイズを行った。

PYの反応を見て感じたのは、このエクササイズで経験したことは全般的にポジティブなものであり、中にはセミナーの終了後に私のところにやってきて、「自分の役割を見付けることができ、すぐにも行動を起こしたい」と伝えてくれた人たちもいた。しかしながら、一方で自分たちの情熱と痛みのつながりを見出すことが難しく、自分の目的や役割が何なのかについて少し混乱しているという人たちもいた。

4 リーダーシップ・セミナー

このセッションの目的

第四回目のセッションの目的は、PYに対して、これまでのセッションで学んだリーダーシップのスキルを実践するとともに、事後活動について考え始める機会を提供することにあった。このセミナーでは各PYが対話の中でリーダーシップを発揮することを促すのに適しているという点でオープン・スペース・テクノロジーという仕

組みをその基盤として用いることとした。その対話の大テーマは「このプログラムが終わった後、どんな問題をどのように解決したいか」であったが、同時に「このオープン・スペースを通じてどのように自分のリーダーシップを発揮することができるか」という隠れたテーマもあった。

内容

リーダーシップ委員会はまず「あなたはこのプログラムが終わった後、どんな問題をどのように解決したいか」という問いを投げかけるところからこのセッションを開始した後、このセミナーで用いることにしたオープン・スペース・テクノロジー（OST）という対話の手法について紹介した。OSTには四つの原理と呼ばれているものがある。すなわち、「やってきた人たちこそが来るべき人たちである」「始まった時こそが始まるべき時である」「起きたことこそが起きるべきことである」そして「終わった時こそが終わるべき時である」の四つである。次に、「二本足の法則」という考え方が紹介された。これは基本的に、全員が対話に積極的に参加する責任を負うことを意味している。したがって、もし話し合われていることに興味を引かれなかったり、何も貢献していないと感じたりしたら、自分の二本の足を使って別のグループに移動しなければならないわけだ。また、OSTには蜂と蝶という二つの役割がある。蜂は一つのグループから別のグループへと意図的に移動しながら、あたかも受粉を促進するように、前のグループで仕入れた情報を落としていく人たちのことを指す。一方の蝶は、必ずしもどこかのグループに属するわけではなく、ただ

フラフラとしている。そして、もし他の蝶を見付けたらなんとなく対話を始めることで、そこから新たなグループの結成につながるかもしれない。これからの原理や法則、そして役割が全て合わさることで、対話により多くの自発性と創造性がもたらされるのである。

それから、次のステップとして、リーダーシップ委員会のメンバーはPYから話したいテーマを募った。話したいテーマがある人は他のPYの前でそれについてアナウンスすることを求められた。20以上のテーマが挙げられ、その中にはワークライフバランス、どうやって子供を育てるか、スポーツ、政策、事業が終わった後の人生、貧困と平等、各国におけるPYの選考プロセスといったテーマが含まれていた。他のPYはどのグループに最初参加したいかを選び、対話を始めた。各グループ毎に時間管理や異文化理解、共感や同情、創造性、そして対話のファシリテーションなど異なるリーダーシップ・スキルが駆使されたことで特有のダイナミズムが生み出されていた。PYは全部で1時間半かけてそれぞれのテーマについて話し合った。その後、それぞれのグループは1分間でOSTを通じて話し合ったことのポイントを全体で共有した。

主な学び

PYの話合いに対するモチベーションはセミナーを通じてとても高かった。大テーマに関連するものである限り、どんなテーマについて話し合ってもよかったので、対話を立ち上げたり、それに参加したりする意欲はいつも以上に高かった。このことから、この事業においてより頻繁にこうした手法を用いれば、PYがより自発的かつ創造的に事業に関わることができるということを学んだ。

PYはOSTを通じてリーダーシップの異なる次元について実践することができた。PYは対話に積極的に参加することを求められていたため、これまでのセミナーを通じて学んだリーダーシップの異なる次元について実践

することができた。特に、二本足の法則があったお陰で、PYは一つのグループに閉じ込められたように感じることなく、自分が参加したいグループを選び、そこで貢献することができたように思う。

OPYの方が概してJPYに比べてより積極的で、発言も活発にしていた。

ほとんどのグループで話合いの場を仕切っていたのはOPYで、JPYは彼らに比べると積極性や発言の回数で劣っていたように見受けられた。したがって、もしかしたらこうした手法はOPYにより適しているのかもしれないと感じた。

参加青年からのフィードバック

- 私はセミナーの最初の方でとても混乱した。何が起きているのか、よく分からなかった。しかし、リーダーシップ委員会のメンバーが、私たちが興味のあることであれば、どんなテーマについて話してもよいと言ってくれた時、とても嬉しかった。そこで、私は自分が情熱を持っているテーマであるワークライフバランスを取り上げた。私がこのテーマを選んだのは、他にもこのテーマについて情熱を持っている人がたくさんいることを知っていたからである。話し合いを通じて、私はそのテーマに関してたくさんのアイデアを集めることができた。
- お互いがどんなことに興味を持っているかを知る上では良い時間だったが、私にとっては話し合いに参加するのが難しかった。最初にあるグループに参加したが、そのテーマについて自分が何も情報を持っていなかったため、話し合いがとても長く感じられた。模造紙に書かれた字も小さ過ぎるものがあったりなかなか理解できなかった。いくつかのグループは人数が多過ぎて自分のアイデアを共有するのが難しかった。OSTは新しいアイデアを思いついたりするのにはとても適した方法だと思うが、学生が大勢を占めるJPYの多くにとっては深刻過ぎるテーマが多かったような気がする。そのため、このような話し合いの仕方では仲間とアイデアを共有する機会がなかなか得られなかった。私にとってこのセミナーは正直難しかった。
- セミナーが始まってしばらくは何が起きているのか分からず混乱していた。しかし、委員会のメンバーから私たちが何をしなければならぬかについて説明があった時、ようやくその理論を理解することができた。仲間といろいろなことについて話すことができて有意義な時間だった。このリーダーシップ・セミナーは私たち全員にとってとても素晴らしいものだったと思う。私はとても自由であることを感じて、いくつか他のグループにも参加し、彼らのアイデアについても理解することができた。
- いろいろな国から参加している仲間たちと他の国々でどんなことが起きているかについて話し合っ、お互いに理解し、アイデアを共有することができたので、良いリーダーシップ・セミナーだったと思う。

委員会としての学び

- 私たちはOSTについて説明することに関してもっとしっかりと準備をしておくべきだった。というのも、特にセミナーの最初の部分でほとんどのPYがどうしたらいいか分からず混乱していたからである。
- それぞれの興味に基づいて少人数のグループで話し合いをする手法はより効果的で、ほとんどのPYにとって望ましいものであった。
- それぞれの興味に基づいたグループ毎に話し合いを行ったことで、PYは同じような興味を持った人たちと集まり、アイデアを共有する機会を持つことができた。
- ほとんどのPYはこのような話し合いの方法に対して積極的だったものの、中には話し合いについていくのに苦労したPYもいた。
- OSTを通じてリーダーシップの異なる次元(前から、後ろから、横からのリーダーシップ)を実践し、体験するとともに、「全ての人々がリーダーである」ということについても学ぶことができた。

アドバイザーからのコメント

この4回目のセミナーについては、リーダーシップ委員会メンバーが企画し、実施するということが最初から私が意図したものであった。これまでに行われた委員会メンバーによる話し合いを通じて、このセミナーで達成したい目的が主に二つあることが明らかになった。第一に、私がかつまでのセミナーで伝えてきたリーダーシップの様々な次元を実践する機会を提供すること。そして第二に、この事業が終了した後、それぞれがどんなことをしたいかについて考える機会を提供することであった。

あるミーティングにおいて、他の委員会のメンバーである一人のPYが興味深い提案を持って参加したこと

があった。その提案とは、PYたちが興味を持っている様々なテーマについて全員で話し合えるようなセッションにするというものだった。それは、先に挙げた二つの目的のうち二つ目に関して委員会のメンバーが求めているものに沿っているように見えたという点で特に興味深いものであった。しかしながら、それを実際にするとなると、それだけでこのセッションの全ての時間を費やすことになり、第一の目的に関することをする時間がなくなってしまうという問題があった。そこで、私はオープン・スペース・テクノロジーという大人数でもできて、かつ全ての人々が責任を持ってリーダーシップを発揮す

ることを促すことができる対話の手法を紹介した。委員会のメンバーは概してそのアイデアを気に入ったようで、それを実施することに決定した。

次に委員会メンバーを四つのチームに分けて、セッション全体のうちの特定の部分について責任を持つことにした。各チーム毎に実際にどうやって進めるかの詳細を詰め、セミナー前の最後のミーティングでそれぞれの計画を共有した。セミナー本番においては、どうやって話し合いを進めたら良いのかについての指示があいまいで混乱が生じる場面が何度かあったものの、PYたちはそれまで見たこともないほどの積極さで話し合いに臨んでいた。このオープン・スペースという手法には、話し合いに参加する人たちの自発性や創造性を引き出せるよう柔軟な仕組みが組み込まれているため、PYの多くが異なるグループの間を行き来したり、新しいグループを立ち上

げたりしている姿が見られた。また、委員会メンバーがその場で必要とされていることを察知し、もともとの計画をそれに合わせて変更するだけの柔軟性を持ち合わせていたという点についても指摘しておきたい。

全体的に言えることとしては、多くのPYが実は誰がどんな問題に関心を持っていて、それについて自分たちに何ができるかをより深く話し合えるこのような場を待ち望んでいたということだ。実際、何人かのPYはこうしたことをこの事業のもっと早い時点でしてほしかったと述べていた。今から思えば、私自身もそう思うし、今後の事業においてこの点を考慮に入れるよう提案したい。また、このセミナーを通じて、より多くのPYが自分の解決したい課題及びそれをどう解決したいかについて他のPYと分かち合う中でリーダーシップを発揮しているのを目にすることができた。

プロジェクトマネジメント・セミナー

プロジェクトマネジメント・セミナーは、以下の成果をねらい、全PYが参加するセミナーを4回実施した。

- プロジェクトを実施する上で基礎となる、プロジェクトマネジメントの概念を理解する。
- PYはプロジェクトマネジメントの概念について理解し、プロジェクトを計画・実施する際、より実現可能

な形で企画・提案ができるようになる（論理的思考力、企画力を身に付ける）。

- プロジェクトの計画、準備、実施、評価の各段階で活用できる具体的なマネジメント手法を学び、活用できるようになる。

1 プロジェクトマネジメント・セミナー

このセッションの目的

プロジェクトマネジメント・セミナーのセッション1では、まず、プロジェクトマネジメント方法について理解するために、具体的に以下の目標を挙げる。

1. プロジェクトマネジメントに関する基本的な理論に関する理解

2. シミュレーション体験を通じた参加型プロジェクト計画のスキルの取得
3. 日本の社会問題（地方における人口減少と高齢化）の共有

内容

アドバイザーの岡田尚美先生がセミナーの目的と、目的の達成方法及びセッション1から4にて実施する内容、セミナーにおける最終成果物について説明した。

理論に関する説明 1

理論として、以下の点が説明された。

- プロジェクトとは何か
- プロジェクトマネジメントとは何か
- プロジェクトプランは何を包含しているか（プロジェクトプランの核となる11の要素）

併せて、プロジェクトストラクチャと、プロジェクトストラクチャの核となる要素の関連性について説明があった。その後、この理論に関して理解を深めるために、ペアワークを行った。ペアワーク後に答え合わせを実施し、理解度を確認した。

理論に関する説明 2

岡田先生より引き続き、理論に関する説明があった。プロジェクトの目的とプロジェクトストラクチャの核となる要素を設定するためには、二つの手法（ギャップ分

析と問題分析)がある。特に、問題分析においてはプロブレムツリー(問題の因果関係)に関する説明を受けた。これに加え、以下の項目がプロジェクト計画策定に重要であることも学んだ。

- 資源
- リスク・マネジメント
- 参加型アプローチ
 - 既存のアプローチ方法との差異
 - 参加型アプローチの利点
 - このアプローチ方法を選択する理由

計画の発表と評価方法に関する説明

プロジェクトマネジメント・セミナー委員会が、本セミナーの最後のセッションで、グループで作成するプロ

ジェクト計画を発表する際の発表方法と評価方法について説明した。

事例の読み込み

本セッションの終了までの時間、レター・グループごとにディスカッションを実施した。議題は、「日本の特定地域における人口減少」である。事例は、全部で3種類(3地域)あり、各グループには三つの事例のうち一つが配布された。各グループは、それぞれに割り当てられた事例を読み込み、問題点を抽出、最終的に問題を解決するためのプロジェクト計画を策定する。また、同じケースの読み込みを実施し、セッション4にてプロジェクト計画発表するまでを本セミナーのゴールとした。

主な学び

今回のプロジェクトマネジメント・セミナーでは、以下の六つの点について理解を深めた。

1. プロジェクトとは

プロジェクトには、達成されるべき明確な目標があること、開始時と終了時が明確に定められた期間内に実施されること、グループで実行されること、資源が限られていること、プロジェクトチームはプロジェクトの終了後解散するものであることなどの特徴を有しているということを学んだ。つまり、プロジェクトマネジメントとは、一定期間内に目標を効果的かつ効率的に達成するためのテクニックであるといえる。

2. プロジェクト・プラン

プロジェクトプランには、以下の要素を含むということを理解した。

1. プロジェクトのタイトル
2. 対象となるグループ
3. 継続期間/期限
4. 対象地域
5. プロジェクト目標
6. 上位目標
7. アウトプット
8. 活動
9. リソース
10. 指標
11. 想定されるリスク

プロジェクトには一つのプロジェクト目標(上記5)が存在し、それらを実現するために、複数のアウトプット(上記7)を置き、具体的な活動(上記8)を行う必要がある。

3. 分析手法

プロジェクトの目的と、プロジェクトストラクチャ(プロジェクト目標・上位目標・アウトプット・活動)をつくるために、推奨される以下の二つの方法があるということ学ぶことができた。

- ギャップ分析：望まれる未来を明確に設定し、現状との差を縮めるためにとる具体的な活動を検討する方法
- 問題分析：対象とするグループが直面している問題を明確にし、その根本原因を含む問題を因果関係で整理する方法

4. リソース

リソースとは人的資源、施設や機材、金銭的資源、そして時間を指す。各活動に必要なリソースを明確に定めることで、プロジェクト全体に必要なリソースを把握することができる。

5. リスク・マネジメント

リスクには主に次の特徴がある。

- 発生した場合にプロジェクトに悪影響を及ぼすもの
- 発生を予測することが困難なもの
- プロジェクトによって発生をコントロールできないもの

これらのことから、プロジェクトは事前にリスクを想定して準備をするべきである。

6. 参加型アプローチ

プロジェクト作りや、計画時の判断にターゲットグループや出資者を参加させることが重要である。

参加青年からのフィードバック

- 私にとって難しいトピックだったが新しい感覚や視点を得られた。また、プロジェクトのどこに中間目標や活動を入れるかに関する練習問題が良かったと思う。1枚の紙ではなく、セミナーの資料を冊子として受け取れたら更に効果的だと思う。
- チームプロジェクトが良かった。プロジェクトのトピックを自分の住む場所や感覚に結び付けて考えることができ、問題についての解決法に興味を持った。
- 今回の内容は、私の所属する地域づくりコースの内容に似ていたので親近感を持って臨めた。練習問題は良

かったが、アウトプットと活動についてのもう少し明確な違いを知る必要があると思った。

- セミナーの前半はPYの活気が不十分だったように感じたが、後半の演習に移ると、積極的に関わることができていた。
- 今回はとても基本的なセミナーだったので、もっと自分たちの能力をいかして、もう少し複雑な課題に挑戦しても良いと思った。練習問題もとても基本的なものだったので、スキルを学んでから問題に取り組みればより効果的だと思う。

委員会としての学び

今回のセミナーの準備は主にJPYを中心として行ったが、事前に集合するとき全員がそろわない、情報の伝達ミスが目立つ等、連携が十分にとれていなかった。また、セミナーに必要な資料の作成を前日の夜に行った、セミナー前に岡田先生と話し合う時間を設けられなかった等、準備が十分ではなかった。事前に委員会で決めていたように、今回のセミナーではグループメンバーの理解をサポートするとともに、質問をまとめるという役割があったが、十分に行えなかった。しかしながら、他のPYから複数意見は聞いており、それらを踏まえて次に私たちがやるべきことが分かった。

まず、もう一度、今後私たちが取り組むプロジェクトの意味や目的を明確に説明できるようにしておくこと。なぜならば、グループのPY全員がプロジェクトについて理解していなければ、グループ内でのディスカッションもスムーズには進まないためである。次に、プレゼンをする時の形式や制限時間をPY全体で共有すること。これらが明確でなければ、今後のセミナー2と3がうまく進まないと予想されるためである。このためには、一

度、岡田先生を交えて現在の状況や不明な点を確認する必要がある。

加えてこれからの運営に関しては、JPY、OPY問わず役割を分担し合うべきだと考える。これまでJPYサブリーダーに仕事が偏りすぎていたため、委員会全体としても情報の十分な理解が得られないまま運営が進み、サブリーダーが一人で大変な思いをすることになってしまった。これらの反省を通して、今後の運営については分担、共有、確認を徹底し、頻繁に委員会全体で集まるのが大切であると考えます。また、各事例について情報を共有し、グループの議論のサポートをできるように勉強会を開く。これはJPY、OPY関係なく、理解を深めるため必要だと考えたからである。

セミナー1全体については適度にディスカッションやペアワークが組み込まれており、効果的な進行だったと思うので、今後のセッションの構成にも役立てたいと考えている。セミナー運営は初めてだったが、準備面や共有面で学ぶことは多かった。

アドバイザーからのコメント

本講義は、4回のセッションで一つのセミナーとして、まず理論を学び、その後実際にプロジェクトの計画作りを体験することで、プロジェクトマネジメントについて理解することをねらいとしている。

今回の講義では、プロジェクトとは何か、プロジェクトのコンテンツはどんなものか、プロジェクトの構造・プロジェクトの目的の設定方法（ギャップ分析・問題分析）などの理論や参加型プロジェクトの意義を初めに提示し、JPYの委員会メンバーが作成した事例を基に、最終的にレター・グループごとにプロジェクト計画を策定することとした。

本講義で重視していることは、プロジェクトの流れを把握し、本講義終了後に使えるプロジェクトマネジメントの考え方を身に付けてもらうことである。

実際のプロジェクトでは、時間・人・モノ・金といったあらゆるリソースが限られている中で、品質やリスクをマネジメントし、最大限の効果を引き出すことが求められる。そのため、できるだけ講義時間を短くし、実際の作業に時間を割くことで、実践的なプロジェクトマネジメントを学んでもらうこととした。

また、本講義の最終回では、実際に考案したプロジェ

クトについて、発表する機会を設けている。この演習を通して、プロジェクトの策定だけでなく、最終的にアウトプットとして表現することで、プロジェクトの理解を更に深めるとともに、他のグループの意見を参考に、視点や内容等の過不足を把握し、フィードバックしてほしい。

SWYに参加しているメンバーは、将来的にグローバ

ルリーダーとして様々なグローバルプロジェクトに参加していくと考える。その中で各々が十分に力を発揮し、確実に実りを収穫し、最大限の効果を創出するためにも、本セミナーにおける種々の体験を通じて、プロジェクトマネジメントの必要性を学び、実行力のあるリーダーシップとマネジメント力を身に付けることを期待する。

2 プロジェクトマネジメント・セミナー

このセッションの目的

プロジェクトの要素を理解する。要素には、オーバーオールゴール、プロジェクト目標、アウトプット、アクティビティ、アサンプション、インプットがある。オーバーオールゴールとは、プロジェクト期間が終了してから達成される大きな目標のことであり、大目標とも呼ばれる。プロジェクト目標とはプロジェクト期間内で達成する目標のことであり、アウトプットとは、プロジェク

ト目標を達成するために必要な成果である。アクティビティとは、アウトプットを達成するために必要な行動である。アサンプションとは、プロジェクトを失敗させるかもしれない要因、つまりリスクである。インプットとは、アウトプットを達成するために必要な資源（金・時間・人など）である。人口減少という課題を抱える日本の地方事例を理解し、問題分析を行う。

内容

- プロジェクト計画に含まれるべき項目
 - プロジェクト名、対象（ターゲット）、期間、対象地域
 - プロジェクトを行う目的
 - 大目標
 - アウトプット（成果）
 - アクティビティ（活動）
 - 資源、投入資本（金、人、モノ等。およそ25,000米ドル）
 - リスク（危険）
- 問題分析：プロブレムツリーを使って事例の問題分析を行い、中核の目標とプロジェクト目標を設定する方法を学ぶ。
 - 対象（ターゲットグループ）が直面している問題を明確化する
 - 根本原因を解決するための活動を考える
 - 中心問題（問題の核心）：問題を解決する上で、最も解決されるべき問題
 - 直接原因：中心の問題が引き起こされる原因
 - 直接結果：中心の問題により起きる結果
- 演習：「バンドゥー」という国の観光に関する事例を使う。
 - 文章を読み、そこからどの情報が各項目（大目標、プロジェクト目標、アウトプット、アクティビティ、リスク、インプット・投入資本）にあてはまるかを考える。
- グループワーク：問題分析
 - 中心の問題をどれに設定するか決める
 - 例：「人口が急速に減少している」「市区町村から去る若者が増加している」
 - 事例のプロブレムツリーを作成する

主な学び

セッションはプロジェクト計画の要素について理解し、どのようにプロジェクトを形作るかについて焦点を当てて行われた。PYは、どのようにプロジェクトデザインマトリックスを作成するか、どのように問題分析を行うか、の2点について学んだ。

第一に、レター・グループ内でバンドゥーという架空の国を用いて、オーバーオールゴール、プロジェクト目標、アウトプット、アクティビティ、アサンプション、インプット、指標などの見付け方を学んだ。

第二に、問題分析の手法を学んだ。その中から一番の核となる問題を決め、その問題の原因が何かを突き詰めていった。これらの手順を踏むことで、問題の解決策をより容易に見付けることができる。直接原因を考え、その直接原因が起こる理由を下に書き出していくことで、問題の原因を掘り下げる。より具体的、本質的な原因が明らかになることで、何に取り組みれば中核の問題が解決され得るかが見えてくるようになる。

参加青年からのフィードバック

- 自身が学んでいなかった多くの新しい内容を学ぶことができた。今回の知識をいかし、自国において多くのプロジェクトを作っていきたいと考えている。
- 今回学んだ知識は様々なプロジェクトにおいて活用できる。個人的に、計画の重要性を学んだ。デザイン思考が地域開発にとって有効となり得る。自身のプロジェクトを改善する複数の手段を得ることができた。
- 防災コースにて被災地活動のプロジェクトを作る活動があり、セミナーで学んだことを実際にコースでの話合いで活用できた。被災地支援を考える際に、支援を打ち切ることが難しく、多くのプロジェクトが終わることができないと知り、期限を決めることや達成する目標の指標を決めることがいかに大切かを学んだ。
- ロジカルフレームを行ったことは、話合いを順序立ててできて良かった。ロジカルフレームを使う練習ができたのも、良い訓練になって正しい思考ができた。セミナーの知識は役に立った。
- 20人で一つのプロジェクトについて話し合うことは困難だった。意見が重なるので、皆で意見を出し合うことが非効率に感じた。グループ同士の距離が近く、お互いの声がうるさくてコミュニケーションがとりづらかった。チームでどのように議論すれば効率的なのかという方法を提示してほしい。
- このコースはとても役に立つものであった。リーダーとして成功し、政治的・経済的・社会的課題に対処するために、プロジェクトマネジメントのスキルは不可欠である。
- PYの理解を最大化し、関心を持たせるための工夫が不十分であった。
- 何にどれほどお金がかかるのか、という情報が無かったため、インプットの部分で見積もりができなかった(予算でどのくらいのことができるか分からなかった)。
- マネジメントの手法を実践する以上に、事前に用意された課題が難しすぎた。地域がマイナー過ぎて、具体的な情報が足りなかった。

委員会としての学び

- 分からない点や不明な点を話し合うことで、プロジェクトを成功させるための正しい思考法を会得した。さらに、岡田先生から直接指導を受けることで自分の思考法の間違いなども知ることができ、更なる理解につながった。たとえばオーバーオールゴールやプロジェクトゴールを決める前にプロジェクトの対象は何か、期限はいつまでか、場所はどこかを定めることが大切だということ学んだ。
- どのようにチームとして行動するか、どのように役割分担をすべきかを学んだ。アナログな方法での意志疎通で、約束を守ることや皆で声をかけ合う、頻りにコミュニケーションをとるといった当たり前のことを実践することが大切だと改めて感じた。ミーティングを行う際、全員が集まるのが難しく、また誰が参加していないか確認していなかったため情報の共有ができていないときがあった。その反省から、決定事項は掲示板に載せるようにした。
- 例題(バンドゥー国における観光活性化プロジェクト)の難しさ
- 一定の参加者(特にOPY)にとっては良い学びとなったが、理解できないPYに対するフォローアップが十分でない場合があった。各委員会メンバーが、自分のグループ内で手助けする形式をとったが、委員会メンバーもきちんと説明できないという事態が発生した。特にアウトプットとアクティビティの違いに関する質問に、明確に答えられないケースがあった。
- グループワークに着手するまでが非効率だった。
- 場所を明確に決めておらず、場所決めやブルーシートを敷く手間など、議論を始めるまでに10分以上無駄な時間が生じてしまった。

アドバイザーからのコメント

このセッションでは問題分析を行う演習が中心だったが、レター・グループでは演習を円滑に進めることが難しかった。それは、グループのファシリテーターが事例をよく理解していなかったこと、また、ファシリテーターの役割やグループ内の議論の指示がはっきりしていなかったためである。講師が演習中にグループを回って

議論を進める支援をしたが、全部をカバーすることができなかった。事前にファシリテーターとの打ち合わせを持っておけばより円滑に演習を進めることができた。また、プロジェクトマネジメント委員会メンバーも自分たちの役割の確認ができておらず、グループファシリテーターを十分に支援することができなかった。

3 プロジェクトマネジメント・セミナー

このセッションの目的

第三回目のプロジェクトマネジメント・セミナーの目的は、第一に、私たちが学んだ内容の復習である。第二に、最終発表に向けたプロジェクト作成である。オブ

ジェクティブ分析とコアストラクチャー、セッション4の最終発表に向けたプロジェクト計画の作成を行った。

内容

岡田先生は、前回までのセッションで進んだところを説明した。その後、問題分析を行う上で気を付けるべき点を説明し、各市区町村における問題の原因の説明を具体的にしよう述べた。例えば、林業に競争力が無い原因が教育の欠如によるものだとすると、具体的に説明する必要がある。また、主体や比較対象を明確にする必要がある。具体的な書き方としては、ただ教育が欠如して

いることを書くのではなく、その市区町村に林業の養成学校がないこと、林業のマネジャーがマーケティング能力を持っていないこと、等のように書く。

その後、プロジェクト作成に当たり目的分析に取り組んだ。目的分析は問題分析を元に、解決策を見付けるために行われた。

主な学び

- どのようにプロブレムツリーを改善させるか?
問題の原因と影響を説明するために、具体的に完全な文を作る。誰が、何が、何と比較して問題なのか、具体的に述べる。
- どのようにオブジェクティブ分析を行うか?
実現可能かつ理想的な状態を示すため、原因や影響を、あるべき理想の状態に言い換える。問題分析に基づいて解決策を見付ける。
- 完全な問題分析やオブジェクティブ分析をした後は、取り組みたい又は取り組むべき課題を決定しその課題を解決するためのプロジェクトを作成する。
- どのようにオブジェクティブツリーから一つのコアプロジェクトの構造に焦点を当てるか?
地域がどのような資源や特色を持っているか、その資源をいかにいかせるか、という視点から、プロジェクト内容を決定する。

参加青年からのフィードバック

- 社会課題や、解決すべき問題について、原因や影響をあいまいに書くのではなく、しっかり文章にして主語・述語・比較対象を明確化することが、正確な問題分析のために不可欠であることを学んだ。この点は非常に大きな学びとなった。
- 目的分析に関して、下位の原因（二次的・三次的原因）の言い換えがアクティビティになり得ることに驚いた。
- 例として使われた問題は、正確かつ実現可能なプロジェクトを作成するに当たって十分な情報が含まれていなかった。
- PYの中には、問題を選ぶことができたなら、恐らくより面白い、実現可能なものになると感じた者がいた。
- セッション内でプロジェクトを作るには時間が足りず、セッション外で多くの時間がかかったグループがあった。

委員会としての学び

- あらかじめ場所を定めテーブルを準備したことで、移動時間やブルーシートを敷く手間を省き効率的に時間を使うことができた。
- グループワークの際、残り時間を知らせ、PYに時間を意識してもらえた。
- どのテーブルにどのグループが座るか、PPTで示さずに口頭で説明し、混乱させてしまった。
- 使用した物品の回収について各グループの委員会メンバーが責任を持つように役割分担をすべきであった。

アドバイザーからのコメント

第3セッションは、問題分析の改善、目的分析、そしてプロジェクト案の選択を行うため、プロジェクトマネジメント・セミナーの中でも最も忙しい時間となった。事例が日本の地方に限定されているという問題、理論が

分かりにくいという意見、演習の方法の問題などもあるが、セッション2よりもレター・グループの議論は活発であった。早いグループは、三つの演習を時間内に終えた。

4 プロジェクトマネジメント・セミナー

このセッションの目的

プロジェクトの主なねらいは問題を解決するための新しいプロジェクトの運営の仕方と計画方法を学ぶことである。今回のセッションの目標は主な三つの地域の問題を解決するためのプロジェクトを計画、発案することだ。

それぞれの地域には異なる種類の問題があり、最初の3回のセッションを通じてPYはその問題についてグループで話し合った。よって、このプログラムはこの事業の事後活動に非常に重要な意味を持つ。PYが何かプロジェクトやその他の活動をするときこれらの学びはいかされるだろう。そしてそれがプロジェクトマネジメント・セミナーの重要なねらいである。

世界の全ての人々はいつも何らかの深刻な問題に直面している。それは個人的な問題かもしれないし、社会的問題であるかもしれない。この最後のプログラムはそう

した問題を理解するために問題を細かく分析し、問題の基礎となる基本的な考え方を理解する方法の習得を促した。これらの学びは問題解決にとっても重要である。この学びの要素が今後の活動に結び付くために、このセッションでは具体的な活動に焦点を当て、完成させた。

また、プロジェクトマネジメントにおいてチームワークの向上もまた重要である。そのため、グループの中でディスカッションを行い、知識を共有した。それもまたこのプログラムのねらいである。

私たちが提案したプロジェクトは日本の三つの地域に基づいたものである。このプロジェクトを計画するに当たって、PYはその地域に住む人々、環境、社会的需要、景観、そしてエコシステムなど全てのことを考慮した。それは私たちが住む地域においても同様に考えることができ、事後活動の中でとても役に立つものと思われる。

内容

今回のセッションは講義ではなく、ディスカッション及びプレゼンテーションを行った。主なディスカッションは、三つの異なる事例に基づいてグループに分かれて実施された。

<プロジェクト計画に必要となる要素>

1. プロジェクト名、ターゲットグループ、期間、ターゲットエリア
2. プロジェクト目標
3. 上位目標
4. アウトプット
5. 資源、投入
6. 外部条件
7. リスク

<今回の事例>

事例1：埼玉県小鹿野町 (A, B, Dグループ)

事例2：鹿児島県瀬戸町 (C, E, H, Jグループ)

事例3：宮崎県串間市 (F, G, I, Kグループ)

これらの町に共通する問題は、人口減少である。生産年齢人口の低下(若年層が離れること等)、高齢人口の増加、出生率の低下などが直接原因として挙げられる。二次的な原因としては、地方において職業が限られている、収入や労働環境が良くない、交通が不便である、教育機関が少ない(良い教育が受けられない可能性がある)、その地域の資源や魅力をいかせていない又は魅力がない、結婚相手が限られている、等の原因が挙げられる。

また観光があまり発展していないため、他県からの観光客が町を訪れず、経済成長も著しくない。そしてそれらの地域は農業が町の中心産業であり、美しい自然が存在する場合が多い。

参加青年はそれぞれの事例について学び、レター・グループによりプロジェクトを計画した。多くのグループがエコツーリズムに関係のあるプロジェクト計画を作った。

最後にこれらの三つのプロジェクトについて最も優れているプレゼンテーションを選ぶための基準として論理性、分かりやすさ、実現性、創造性という観点から評価が行われた。

・ 各グループの地域活性化プランの内容

A	<p>タワーファームिंग(各階が農地となっているビル(例:シンガポール)) タワーファームINGを大学等研究機関と提携して行い、エコビレッジのモデルを目指す。タワー内で、名産である花を使った養蜂も行い、研究者を始めとする人々を誘致。加えてエコビレッジに関連する活動で若年層の雇用機会を増やし、人口の流出を抑制する。また、タワーファームINGの成果を上げ、所得の拡大も実現させる。</p>
B	<p>ヤギ牧場 衰退した森林を伐採してヤギ牧場を作り、土地劣化を回復させる計画。ヤギは森を再生するのに良い動物とされているためである。二次的な効果としてヤギのチーズやミルクを販売し観光客を誘致するきっかけともなる。 背景:外国産の安価な木材の輸入により、国内産の高価な木材が売れなくなり、小鹿野町の主要産業である林業が衰退した。その結果、林業ではなく他の職業に就く人が増え、森林管理をする主体がいなくなってしまった。</p>
C	<p>Agriculture for World Youth(世界青年の農業) 世界各国から数名が集まり、1週間程度寝食を共にして、農業体験をする。国際交流を深めるとともに、穎娃町の主力産業である農業という資源をいかし、人を集め、町を活性化させる。</p>
D	<p>ダリアの花を活用したフラワーパーク(観光施設) 関東地方最大面積を誇るダリアの花畑を地域の特色とし、観光客を呼び込むことで地域の活性化につなげる。またダリアンという「ゆるキャラ」を作り地域のイメージを分かりやすく説明する。</p>
E	<p>古民家活用による若者移住促進 古民家の使用条件は 会社 レストラン等のレジャー施設 新たに農業をすることのいずれかとし、 新たに雇用を生み若者の流出を食い止め、市外の若者も集める。 観光客数を増やし、地域経済へ貢献する。 農業を行いたい若者に機会を提供する。</p>
F	<p>串間市の魅力を発信する広報 住みやすい街であることを発信し、以下のイベントを行う。 街コン開催 生活体験ツアー実施</p>
G	<p>フェスティバル 町にある観光資源である、レジャー施設、空き家を利用し、宿泊施設などを作り、ビーチや乗馬をいかしたフェスティバルを実施する。フェスティバルを通して地域の魅力を発信し、町に来る人の数を増やし定住につなげる。</p>
H	<p>観光ビジネス(バスツアー) 観光資源のある隣町と連携して行うバスツアーにより、新たな観光客を穎娃町に誘致する。バスツアーは穎娃町の魅力である自然をいかしたエコツーリズムやグリーンツーリズムを主とし、観光産業を通じた地域活性化及び観光客へ穎娃町をアピールすることで将来的な人口増加を図る。</p>
I	<p>IT教育施設(職業訓練施設) ITスキルを身に付け、お互いに教え合うことで、収入安定化と人的交流の活発化が実現され、労働人口(特に若者)が市内にとどまる。IT教育施設はアクセスの良い空き家を活用する。</p>
J	<p>Mcity Explore + Enjoy + Live! 目標:若者が居つく街を造る 手段:地域住民間のコミュニケーションを活発化させる ・ゆるキャラ ・地域の芸術を活用した毎年の祭り ・緑茶の産業活性化(緑茶作り体験・商品開発) ・物産展(名産品を売る場)</p>
K	<p>お見合い観光バスツアー(自治体保有空きリソースの提供及びアフターケア) 観光客の減少により稼働頻度が減っていた観光バスをお見合い観光バスとして有効活用する。また、当ツアーで成立したカップルには自治体保有の空きリソースを住宅として安価で提供する。加えて、アフターケアとして、ツアーを通じて成立したカップルがこの土地で結婚、出産した場合には、お祝い金を支給する。お祝い金は、自治体の予算及びツアーによる収益から賄う。このプロジェクトにより若年層の流入増加が見込まれ、少子化に歯止めをかけることができる。</p>

主な学び

このセミナーで特に学んだのは、プロジェクト計画の在り方である。計画の内容を作るため、既に問題分析と目的分析を行ってきた。これらの分析に基づいて、今回、グループで短い時間であったが、計画作りを行った。

プロジェクト計画の中核構成とは、プロジェクトの要約を意味する。仮説を明確化するためのものである。つまり、何を行えばどのような結果が得られるか、どうす

ればプロジェクト目標を達成できるか、という道筋を明確化するものである。

私たちは、目的分析系図（オブジェクトツリー）の中から、今回のプロジェクトで扱うテーマを選んだ。グループごとにプロジェクトのアプローチを選んだ。プロジェクトは現実的で持続可能なもの、地域の資源を有効活用できるものであることが好ましい。

参加青年からのフィードバック

- 地域活性化に関するプロジェクトを行うに当たって、様々なアイデアを学ぶことができた。ほかのグループが考えたことを学び、それについて議論することは自身の考えを深めることにつながった。
- プロジェクトが完成していないチームが多くあった

ため、準備時間を削るのは難しいが、1チーム当たりの発表時間を増やしたほうがよいと感じた。

- 投票結果の集計に時間がかかるという問題はあるが、審査員だけで結果を決めるのではなく、PYにも投票させる制度にしたほうがよい。

委員会としての学び

前回のセミナーの反省をいかし、どのチームがどのテーブルに座るか、前もってスライドに示したことで、円滑なセミナーの運営をすることができた。

日本の市区町村における地域活性化の事例がOPYにとってはなじみのないものであったため、現状を想像することが難しかった。各国共通の問題を複数挙げ、参加者が取り組みたい事例を選べるようにする形式などが適切であった。

委員会メンバーによる事例作りが不十分だったため、事例の情報が十分に提供できなかった。そのためPYがプロジェクトを作る際にアイデア・選択肢が限られ、混乱を招くなどの状況となってしまった。また事例を三つ準備したが、事例によって書かれてい

る情報が異なるなど、情報の統一ができなかった。

最後の委員会のミーティングで岡田先生から、プロジェクトの最終発表の進め方についてアドバイスももらった。委員会のメンバーは、発表の間、どの作業にどれだけの時間が必要であるか、事前にシミュレーションを行い、プログラムのスケジュール、アウトライン、内容、時間配分について提言することができた。プロジェクトマネジメントに関して、このような実践的な機会を通じて理解を深めることができたことは非常に有意義だった。セミナーのプログラムをいかに価値のあるものにするかについて、委員自身がイニシアチブをとって積極的に考えていくことが必要であると実感することができ、またそれを実践することができた。

アドバイザーからのコメント

セッション4は、前半でプロジェクトを完成し、後半でそれを発表した。しかし、プロジェクトを完成させるのに時間がかかり、プロジェクト案が中途半端になったグループが多く、時間の配分に気を付ける必要があると感じた。11のグループ発表は多いので退屈するかもしれないと懸念していたが、それぞれの発表は個性的でよく考えられていた。プロジェクト案は5人のコース・ディ

スカッションのファシリテーターとアドバイザーに依頼した。審査基準は、論理性、平易な内容、プロジェクト目標の達成可能性、独創性の4点とした。事例ごとに高い評価を受けたのは、事例1ではDグループ、事例2ではCグループ、事例3ではIグループだった。事例によって、結果は大変僅差で選ばれ、優秀なプロジェクトが数多く発表された。

PYセミナー

PYセミナーは、以下の成果をねらい、3回実施した。
PYは各自、興味のあるセミナーを受講した。

【セミナーを主催するPY】

- 自分のこれまでの経験や専門分野をまとめ、「人に伝える」という経験を通して、プレゼンテーション能力を高める。
- 多国籍の人々の前に立って英語で発表し、セミナーをファシリテートするという経験を通して、リーダーシップを学ぶ。
- セミナーを実施することにより、プロジェクトの企画・立案から実施までを実践できる。



【セミナーを受講するPY】

- 同じ事業に参加している仲間とどのような背景を持ち活躍している人がいるかを知ると同時に、各国における青年層の取組について学ぶ。



参加青年の感想（アンケートより抜粋）

- SWYのプログラムの中で、PYセミナーが一番良かった。このような活動の時間を増やすべきだと思う。ただし、PYセミナーを選ぶ時点でそれぞれのテーマや発表者の質が分かるようにする必要がある。
- 日本人の生き方について学べたことは、大変貴重なことであった。また、ディスカッションを通してほかの国の生活について比較することができた。
- ファシリテーターやアドバイザーから社会人としての本音を聞く機会が十分に与えられない環境の中で、参加青年間でキャリアに関する互いのジレンマを共有する機会となり、大変有意義な時間だった。
- PYセミナーがもっとあれば良いと思った。聞きたいセミナーがたくさんあって、いつもどれにするかかなり迷った。近い存在から話が聞けるというのがとても魅力だった。

PYセミナー一覧

主催者の国籍 (開催時間)	セミナーの題名	発表者名	目標
オーストラリア・ ニュージーランド (75分)	私たちは第三世代	Miguel Vera-Cruz Naomi Simon-Kumar	第三世代の文化(現象)を紹介し、文化、国籍とアイデンティティの認識を問い直す。
チリ (75分)	ストーリーテリングの力: 物語を伝える理由と効果的 な読み方	Enrique Núñez Mussa	物語(ストーリーテリング)とその技を用いて人生を送ることがいかに仕事や日常生活において強力なツールになるかを共有する。
チリ (75分)	教育的なリーダーシップ と青年の関与	Oscar Contreras Villarroel	参加者のチームワークの能力を高め、個人のリーダーシップ・スキルを伸ばし、向上させる。
チリ (150分)	社会変革のための 文化と芸術	Osvaldo Guzmán Núñez Matías Rodríguez	中南米諸国での事例を用いて、芸術文化がどのように社会変革や発展を促すことができるか、基本的な関係性を紹介する。
インド (75分)	ほ 咆えろ...トラを救えるのは トラだけだ	Sweety Pandey	インドを代表する動物であるトラを例として絶滅危惧種について紹介し、トラを保護するために何ができるかを伝える。
インド (75分)	インドの伝統文化	Pawan Singh	伝統文化を伝え、自営と伝統文化の関係性を評価する。
日本 (75分)	人身取引 知っていますか?	林佐織 石丸遼子 木津 佑允	人身取引が先進国と呼ばれる日本においても存在していることを知ってもらうとともに、最終的には人身取引の被害者になることが多い発展途上国の人々の人権について考える。自分の生活に直接的に関係ないと思いがちな人々が人権について考える機会にする。
日本 (75分)	理想的なCSRとは 何だろう	松岡俊介 岡部祐季 岩崎咲穂 金子ちあき 岩崎広樹	参加型ディスカッションを通して、CSRの理想像について考え、将来企業に勤めた際や自分の職を持ったときにできる社会貢献活動についての見聞を広げてもらう。
日本 (75分)	みなさんの笑いのツボを 教えてください!!	石丸遼子 林佐織	コミュニケーションのうち、93%が非言語で構成されていると言われる。その一つの「笑い」をテーマとして、各国の笑いの共通点を探すとともに、ユーモアを理解し合い、社会貢献につなげる。
日本 (75分)	サッカーを取り巻く環境 ~色とアイデンティティと 人種差別~	岡田晃範	サッカーを例にとり、組織や会社、個人のイメージカラーとそのルーツのシェア及びこれまで見聞き、体験した人種差別を共有し、人種差別を無くすために必要なことを話し合う。違いを理解して、受け入れることができれば偏見や差別は無くなると考える。
日本 (75分)	ありのままの自分を 好きになる - No1よりOnly 1 -	横井理帆 井元龍太郎	自己肯定感を上げる方法を知る。プレゼンテーションとワークショップを通じて、すでにその人が持っているOnly 1を見付ける。また、承認欲求が起きるのはどのような時かということに気付くようになる。
日本 (75分)	ワークライフバランス	山本さゆり 山本万優 木下真希 花岡里伸	参加者自身の理想とする仕事と生活の調和のとれた生き方がどのようなものか考える。また、ワークライフバランスに関する日本と各国の課題とワークライフバランスの実現に向けた取組について伝える。

目標は達成できたか	感想
できた。多くのJPYのフィードバックは好意的で、異なる視点で考えるよう刺激を受けたと言っていた。ディスカッションは公平でバランスがよく、全員が発言をしていた。	リスニングのスキル、我慢強さ、パートナーと協働すること、意見交換、他の人の見解を尊重すること。聴衆が人種、文化や国籍に対する思い込みや固定観念を見つめ直し、互いに敬意を持って接することができるようになることを願う。
できた。PYは非常に積極的かつ熱心で、フィードバックも好意的だった。	様々な国から来た様々な背景を持つ聴衆に第二言語で話をしたり、事例を発表したりするのは、とてもためになり、やりがいがあった。聴衆はより批判的な方法で物語を読んだり分析したりできるようになると思う。
できた。参加青年は自分自身をよりよく知り、どのようにすれば、他の人とうまくやっていけるかについて理解できた。	聴衆は自らのリーダーシップ/ワークスタイルについてよりよく知る機会を得られ、グループで、どのように他の人たちとうまくやっていくかについて共有していた。
セミナーのゴールは完璧に達成できた。参加者一人一人が内容に満足し、そのことについて熱心に話したがっていた。	セミナーを主催し、時間管理をはじめ様々なアシスタントと調整を図る経験ができ、すばらしい体験になった。
できた。参加者は自国の絶滅危惧種について話し合い、トラを保護する際に貢献できることに関心があった。	自信を持てるようになった。参加者は気候変動や絶滅危惧種などについて知った。自国の絶滅危惧種について話し合い、保護するためにできることを学んだ。
できた。それは、私が興味を持った頃のインドの伝統文化と雇用の主な源を関連づけようとした時である。	様々な国の人々にこのトピックで話ができてすばらしい機会だった。お陰で自信を持つことができた。聴衆は文化的な活動をすることで幸せな気持ちになるという興味深い事例を学んだと思う。これこそが雇用の主な源になる。
アンケート結果や、来てくれたPYの反応を見て、日本にも人身取引が存在していることを知ってもらえた。ディスカッションの中で各国の状況も共有できたので、理解は深まったと思う。	大学で学んでいる人身取引の問題を自ら伝えることを通して、知ることや学ぶことは違った難しさを感じた。人身取引が他人事ではないということを知ってもらえた。そして、それを解決するには私たち個人個人のカも無駄ではないということに改めて認識することができた。
ディスカッションが長引いて、ゴールのCSRの理想像を見付けるところまではいけなかった。	様々なバックグラウンドや国の人たちの前で日系企業のCSR事例を紹介でき、意見をたくさんもらったことは本当に良かった。一つの大きな気付きは、CSRの定義が不明確だったこと。日本だけの目線からプレゼンテーションをしてしまったが、その分、新たな気付きを得ることができた。
OPYとJPYのミックスだったからこそ、セミナーが盛り上がり、各国の笑いを共有することができた。英語がスムーズに話せない人でも、笑いをツールにすればコミュニケーションが図れる、ということも伝えられた。	非言語学では、七つの感情-悲哀、怒り、失望、恐怖、感動、驚き、幸福は基本的に世界で普遍の感情であるといわれている。本セミナーでは各国の人にいくつかの感情を顔で表してもらい、聴講者がそれが何かと答えるという簡単な実験もした。そこで本当に普遍的な感情が存在するのだということも分かり、とても興味深かった。
聴講者の人数は少なかったが、参加者が積極的に発言してくれた。日本では一時的にしか話題にならなかった人種差別の事例についても、かなり鋭い反応があった。日本で起きた事例についても、「信じられない」「なぜ？」と真剣に話し合われ、グローバルな舞台に不可欠な内容を話し合うことができた。	生まれて初めて英語でプレゼンテーションをしたが、自分が興味のあることを話すのはとても楽しかった。植民地経験もなく、差別の体験も乏しい自分にとって、多くの反応が返ってきたのは嬉しかったが、もっと勉強する必要性も感じた。人種差別の事例を紹介し、原因やその根深さのある程度明確にすることで、自分が潜在的に持っている意識が表面化できれば面白い。
このセミナーを通じて参加者は自分の隠れた能力に気付き、周りから自分のOnly 1を指摘してもらうことで、自分の強みを発見できた。「これまで、自分の Only 1を見つける機会がなかったのが新鮮だった」「ありのままの自分を愛することが大切」とポジティブな意見をもらった。	セミナーの実施を通じて、セミナーは自分の知識をただ伝えるだけではなく、聞き手に理解してもらって初めて成り立つものであると感じた。また、聴講者は「他人との比較は向上心につながる一方で、自分の行動の妨げになる」「自己肯定感を持つことは生きる上で重要である」ということを学んだ。
できた。各国のPYが目指す人生計画を共有することができて面白かった。	OPYとライフバランスの考えが異なり、説明の仕方が難しかったが、色々な人が助けてくれて、皆の人生観を共有したことで、自分のキャリアや人生を考える良いきっかけになった。

主催者の国籍 (開催時間)	セミナーの題名	発表者名	目標
日本 (75分)	難民問題を考えよう	荻原沙理 金森早紀 笠松美紀	PYに日本にも難民問題があることを知ってもらい、自分が難民を受け入れる立場になった時、どのようなことが考えられるかを考えてもらう。各国で起きている問題をディスカッションを通して共有し、より現場に近い人の声を聞く。
日本 (75分)	フードウェイスト - もったいない精神 -	今井啓 稲垣里帆 原莉子	食糧廃棄の問題に関して、一人一人がより真摯に考え、今の自分にできることはあるか、自分に何ができるのか考えてほしい。そして、考えるだけでなく、行動に移してもらう。
日本 (75分)	旅行を通じた異文化理解	山本万優 清水葵 金子ちあき	国が国際化するとはどういうことか、外国人にとって優しい国とはについて考える。
日本 (75分)	食から社会を変える！	南明里 丹羽智佳子 中嶋路央 宮嶋はるか 荻部麻利亜 浅井夢帆	食生活、食習慣の中にある問題に気づき、改善し、健康を維持するために 1. 理想的なメニューを作る 2. 理想的なライフスタイルを実現させるためのゴールを設定する
日本 (75分)	より生きやすい社会について考えよう - いじめと自殺とプレイバックシアター -	上小澤圭那 佐々木麻衣	・プレイバックシアターの魅力について知ってもらう ・日本では年間3万人が自殺していることを知ってもらう ・日本のいじめや自殺問題について発表し、その後各国の同様な問題について話し合い、互いの国の事情を知る ・どのような社会であれば生きやすいかを考える
日本 (75分)	社会を変えるマイノリティ	村上達哉 斎藤夏海 岡部祐季	各国におけるLGBTの現状について理解を深める。LGBTにおける取組を例に、一人一人の行動で国の制度や社会に変革を起こすことができるという点を伝え、PYがそれぞれの問題意識に従って何ができるか考えることを目指す。
日本 (75分)	平和の作り方	山村順子 岩淵静香 甲斐史織 大谷文也 成田穂香	どのような状態でも暴力は存在し得ることに自ら気付いてもらい、紛争が起こり得る状況でどのような平和的(非暴力的な)アプローチができるか考えさせること。
日本 (75分)	技術の適材適所の 実現による、 より良い社会の実現	廣瀬仁徳	1. 既に開発された技術や製品が必要な地域に移転されていない事実を認識する 2. 製品や技術を移転するのに障害となっている原因を特定する 3. 2で特定した原因を取り除くためにできること、できないことを考え、共有する
日本 (75分)	継承とは何か - 被爆証言を事例に -	三輪卓見 深水菜津美 堀内彩夏	現在の被爆証言の継承の在り方を批判的に検討し、OPYからの異なる意見を取り入れ、「世界共通体験」とするための今後の継承について考える。

目標は達成できたか	感想
<p>すでに難民を受け入れている国のPYがたくさん参加し、経験に基づいた話をしてくれた。私たち(主催者)だけで話しているだけでは出てこないようなアイデアをたくさん聞くことができて嬉しかった。</p>	<p>あまり難民問題に関わりのないIPYの参加を想定して準備していたので、既に多くの難民を受け入れている国の人からすると的外れな内容があったかもしれない。JPYにとっては「あまり知られていないが重要な問題」であっても、ある国では20年以上も話されている問題なのだと改めて気付いた。参加者からのコメントで「日本人が難民についてどのような話をするのか聞きたかった」「日本の政策を知りたかった」等、日本の問題に興味を持っている人が多かったことが分かったので、有益な情報交換の場になったと考えている。</p>
<p>にっぽん丸における食べ残しを減らすという目標は達成できたのではないと思う。また、セミナーの最後に、これから食べ残しを減らすために自分たちができることを決めてもらった。</p>	<p>何かを人に伝える時、ゴールをしっかりと設定し、それがずれないように話を進めていく方が、効果的に意図を伝えることができることを学んだ。計画的に準備をする、当日の時間管理などマネジメントの大切さも学んだ。</p>
<p>できた。皆が他国についてどう考えているのかを考え、話す機会を持てた。</p>	<p>皆が日本についてどう思っているか、事業終了後にどのように日本のことを伝えていこうと考えているかを共有することができた。</p>
<p>アンケートに、参加者全員が「有意義だった」「食生活を変えようと思った」と書いていた。ゴールについて一人で考えるのではなく、複数で共有することで、それぞれの理解がより深まった。</p>	<p>参加したPYが意見を言いやすく、主体的に動けるような雰囲気作りが大切だと気付いた。準備段階で様々な情報を調べていたが、乗船後に、自分たちが本当に話し合いたいこと、知りたいことを整理し、方向転換した。意識のすり合わせが重要だと感じた。「食」は世界共通の話題だが、個人によって異なるとらえ方(宗教、信条、習慣)があることを改めて認識できた。</p>
<p>できた。今回は特に自殺問題について取り上げ、その解決策として「プレイバックシアター」を紹介できた。セミナー後の質疑応答では、各国の青年の抱える生きづらさの現状を共有し、社会問題に対する意識を高めることができた。</p>	<p>「プレイバックシアター」を世界をより良くする方法の一つとして挙げたが、聴衆にはあまり伝わっていないように感じた。セミナー全体の構成、質疑応答に対する準備が不十分だった。参加者には「自殺問題」について知ってもらえたとし、世界では既に知られている「プレイバックシアター」という手法をJPYにも紹介できた。また、各国の抱える社会問題について全体で共有できた。</p>
<p>ある程度はできた。当事者へのインタビューを通して、LGBTの声や、日本の労働環境の問題点や、それを変える可能性があるケースについて伝えた。LGBTやジェンダー、アイデンティティ等は、センシティブな内容を含むため話題になりにくい。セミナーでは、議論の場や考えるきっかけを提供できた。このトピックを取り上げたこと自体にも大きな意味があった。ただ、議論や意見交換の時間が十分に取れず、個人が社会に対して何ができ、何をすべきなのかを考えることができなかった。</p>	<p>セミナーを開く際には、発表内容以上の事柄も網羅して臨むべきだと実感した。PYからの質問に適切に答えられず、参加者の理解や議論が深まらないことがあった。このような難しいトピックに関して、当事者以外の人にも「自分には何ができるのか」と真剣に考えることが分かった。このような理解者やサポーターがいるからこそ社会は変えられると実感した。</p>
<p>できた。参加者がアクティビティを通して「自分自身も紛争の加害者になる可能性があること」「自分の目標を達成することに専念している最中は、他の人たちも一緒に目標に向かっていくことに気付かず、視野が狭くなっている」等、重要なポイントを指摘してくれたから。</p>	<p>ポイントを絞って詰め込みすぎないようにしたことが成功につながった。また、こちらが教えるのではなく、参加者自らが気付くようなアクティビティにしたので、学びが多かった。紛争を体験しながら、紛争のプロセスを学び、トランセンド(超越)法によって、二者以上の利益になるような視点を持つこと、紛争と心の状態がつながっていること、混乱した状況でも自らを冷静に分析する方法を学んでもらえた。</p>
<p>できなかった。 1. 準備不足で、タイムマネジメントに問題があった。ゴール3について考えてもらう時間が確保できなかった。 2. ゴール2の具体的な事例を提示できなかったため、参加者の理解を促進できず、十分に議論できなかった。</p>	<p>セミナーを開催するには入念な準備(調査・シミュレーション等)が必要だと実感した。OPYからの意見のお陰で、自分では気付くことのできなかったことや各国の事情を知り、今後、グローバルな環境で戦っていくための貴重な糧になった。技術移転という見えにくい課題を認識すること、また、その難しさについては理解してもらえたと思う。</p>
<p>できた。体験を世界の人々と共有するためには、日本人の戦争/平和観や原爆への認識を一方向的に押し付けるだけでは難しいという問題意識があったため、OPYとともに、意見の違いを実感し、その後の議論(構想)へとつなげられたから。</p>	<p>「避けられやすいテーマ」であることを考えて、どうすれば内容を網羅するだけでなく、誰もが参加できる議論になるかを考えて工夫した。参加者の中には原爆について基本的なことは知っていても、実際に起きたことを初めて聞く人もいた。今後、原爆や核問題について考えるきっかけになった。議論を通して、それぞれの国特有の戦争観や核に対する考え方があることを共有できた。</p>

主催者の国籍 (開催時間)	セミナーの題名	発表者名	目標
日本 (150分)	ワークショップ: 21世紀に生きる子供の教育を考える	橋本智恵 森本由貴 沼澤綾子 黒川恵理子 兼成梨奈 花岡里仲 西川祐亮	未来社会(2030年代)を共に予測し、グローバルな共通課題を共有。未来の課題を「子供の教育」の面からアプローチし問題解決できないか模索し、いずれ親になる私たちにできることは何だろう?と考えるきっかけにしたい。
日本 (75分)	シェアリングエコノミーが世界にもたらす可能性	草島一斗 浦出優輝 松家史弥	「シェアリングエコノミー」というモノ、スペース、人のスキル等を効率的に共有し、より豊かな生活を送るという新しい概念を理解し、SWYでの共同生活や今後の人生に役立てることを目指す。
日本 (75分)	プロジェクトを通して行う国際協力活動	長谷川貴大 菊池恵理	国際協力活動に興味を持ってもらうことを目指す。
日本 (75分)	宇宙を広げよう	福島広大 恩田亮陽	宇宙の広がりを通して、この世に一つしかない地球の尊さを実感してもらう。また、各自の世界観が広がることで、地球市民としての意識を再認識してもらうことを目指す。
日本 (75分)	「私たち」はどう政治に参加すればいいか	山本さゆり 国仲祐希 比嘉愛莉	「投票の質を上げるにはどうしたらよいか」「デモを政治参加の手段としてどう考えるか」について考える機会を与えることを目的とする。
日本 (75分)	持続可能な社会形成に求められるものとは - エネルギーの地産地消と電力の双方向融通 -	岩澤宏樹	1. (1) 自分たちが使っているエネルギーはどのように供給されているか、(2) なぜ、再生エネルギー導入は進まないのか、(3) なぜ、日本では原発再稼働の動きが進んでいるのか 2. 生活上の環境負荷の低減に取り組んでもらうことを目指す。
日本 (75分)	ソフトパワーの可能性	林典子	1. 自国の政策や文化への興味をより深める 2. 他国の魅力を政策や文化を通して知る 3. ソフト・パワーを通じて、個人ないし企業で国際社会に仲間を作る能力を身に付ける
日本 (75分)	福島原発事故、東日本大震災からアイデンティティを考える	波多腰純也	東日本大震災や原発事故の惨事を風化させないために、現状を共有する。さらに、同様の惨事が起きた場合、被災者、支援者、自治体が取べき行動、懸念も共有する。
日本 メキシコ (75分)	映画「ラスト・サムライ」を通じて考えた三つのこと	浅井広大 Edgar Pérez Alonso	参加者に以下の3点について考えてもらうことを目標とした。 1. 日本文化 2. 異なる考えを持つ人々たちとのコミュニケーションの取り方 3. 批判的思考方

目標は達成できたか	感想
できた。こちらが用意したグループワークを全て実施できたから。ただ、更に議論を深められたらよかった。	セミナーを開催する側になり、実践を通して心得ておくべきことを学べた。各国の青年が考える未来の教育には、創造力を重視する等の共通点があることに気付けた。独創的な視点にも触れられたし、未来の教育について考えるきっかけとなった。また、継続的に議論できるように、掲示板を作り、事業終了後もアイデアを交換していくこととした。
できた。アンケートに非常に多くのPYが、この新しい概念を理解した上で、船上生活を豊かにするアイデアを書いてくれたため。	全体的に楽しい雰囲気が進められた。反省点は、気を付けていたにもかかわらず、一方的な説明が長くなってしまったこと。SWYでは、PY同士の交流を重視すると満足度が上がるように感じた。船という閉ざされたコミュニティにおいて、限られた資源を有効に活用する大切さを学んでもらえた。
できた。セミナー後のアンケートでは、カンボジアに行きたい、協力活動をしたいという声が多くあったから。	英語で自分の熱意を伝える難しさを改めて思い知った。普段はプレゼンテーション用の原稿を用意しないが、英文の原稿を用意して読む形にしたため、原稿に目を向けすぎて、聴衆の様子を見ることができなかった。
できた。アンケートのコメントの中に、これまで知っていたものよりずっと広い世界が存在していたことや、地球がいかに尊い存在であるかということに対する驚きが表れていた。	日本語でも説明が難しい宇宙に関する話を英語でいかに分かりやすく説明するかという点で多くの学びがあった。国籍や文化の違いを越えて宇宙が一つの価値観を与えようことを確信した。参加者は一人一人の人間が全て地球という星の一員であることを改めて実感し、グローバルな視野を養うことができた。視野が広がったというコメントがあった。
どちらともいえない。セッションを設け、時間通りに進めることはできたが、深い議論をするには時間が足りなかった。	準備のための取材でたくさんの人と出会い、多くの見識を得られた。今までぼんやりとしか考えていなかった政治参加の問題について、「ゴール」に記載した二つの疑問にまとめることができた。同じ疑問、関心を持つ人とつながることができた。政治家と無関心な市民の間に「自分の意見を持って行動する市民」がいるということを知った。具体的に自分はどうすべきかを考えてもらえた。自分でセミナーの準備をすることで、準備の大切さを学び、他のセミナーにも積極的に取り組むようになった。
部分的にできた。参加者の理解が深まったので、1.は達成できた。2.は自発的な選択であり、生活で具体的に何をすればよいのかという説明をしなかったため、達成できなかった。その代わりに 低炭素技術の説明をし、参加者にも有益だった。	各国のエネルギー事情や、OPYにとって、日本のエネルギー政策や原子力発電の問題がどのように映っているのかを知ることができた。
3.はできなかった。多くの参加者がソフト・パワーの知識を持っており、私の提供した情報は浅かった。各グループで新たなソフト・パワーを創り出す企画は、時間が足りずにできなかった。しかし、1.と2.は、いろいろな国のPYで構成されるグループでディスカッションをしたので、各地のソフト・パワーを共有できた。	失敗を恐れることはないということを学んだ。私は英語に自信がなく、7枚も原稿を用意していた。紙を見て話すことが多く、緊張で話の流れが飛んだり、単語が出てこなかったりした。伝えたいことは自分の中にあるのだから、聴衆を見て訴えるべきだということを思い出したのは、話の終盤で、終了後はひどく落ち込んだ。しかし、セミナー後、PYが感謝や感想を述べに来てくれて、アンケートでは誰も私を非難したりせず、こんな話題も話し合いたいとか、こんな工夫をしたらどうかと提案してくれた。また、改めて自分の国の強みを考えてくれたと言ってくれた。
できなかった。被災者の立場の話に多くの時間がかかってしまい、支援者、自治体の立場からの視点を深く考えることができなかった。	自分自身も学ぶことが多かった。参加者から「日本に移住することを考えているが、妊婦の健康への影響を知りたい」と質問され、海外では、今でも原発の安全基準を疑っているように感じた。今回は、原発、震災の基本情報と企画者の活動内容の共有を中心にしたが、先ほどの質問に回答するには不十分だった。参加者からの質問をセミナーに反映させたより良いセミナーを作っていきたい。
1点目と2点目については達成できた。参加者のコメントから、この2点については貴重なディスカッションができたことが分かったが、タイムマネジメントができなかったため、3点目について話すことができなかった。	全体的にセミナーはうまくいった。10か国から来た参加者と様々な価値観について話し合うことができた。しかし、時間のマネジメントができず、映画監督に必要なスキルでもある「批判的考え方」に触れられなかったことが残念だった。

主催者の国籍 (開催時間)	セミナーの題名	発表者名	目標
メキシコ (150分)	地球憲章	Jose Ruiz Sofia Corona	21世紀の公平で持続可能かつ平和なグローバル社会構築のため、倫理的枠組みとしての地球憲章の活用と知識向上を推進する。
メキシコ (75分)	ドキュメンタリー映画: Take My Beloved Ones Away	Natalia Martinez Luna Vicente Gabriel Valdelamar	ドキュメンタリー映画を通じ、中米からメキシコ経由で移住している現状や、列車が通過する際に食糧を配布している女性グループの励みになる取組について共有する。
ニュージーランド (75分)	冒険を通じて変化を生み出す - ペットボトルのカヤック -	Ajay Ravindran	変革を起こすことは決してつまらないことではなく、世界をより良い場所にするためには楽しさやワクワクする気持ちをいかせることを参加者に伝える。その実例として、自分自身のペットボトル・カヤック・プロジェクト「ニュージーランドでの環境冒険プロジェクト」について話す。
ニュージーランド (150分)	自信、目的と詐欺症候群	Angela Lim	個人的なストーリーを用いて、目的を見出す際に必要な考慮すべき様々な事柄を理解してもらう。
ロシア (150分)	More Music - Less Borders(音楽が増えれば 国境がなくなる)	Dmitriy Burmistrov Daria Buchakova	音楽は様々な文化的背景を持つ人々に平和と理解をもたらすことができることを伝える。
ロシア (75分)	社会の発展に良い影響 を与えるための スポーツ・ボランティア	Anastasiia Berezina Ilshat Sharafutdinov Karina Subbotina	スポーツ・ボランティアに関して、その役割と社会への貢献について伝える。大きなスポーツ・イベントでのボランティア体験を通じて感じたことを共有し、FIFAワールドカップ・ロシア2018でのボランティアについての情報を伝える。
スリランカ (75分)	根本的な態度の 変革と発展	Thejani Hewage Milan Hatharasinghe	参加者に戦略的マネジメント及び人生とのかかわりについて知ってもらい、人生の目標への意欲を高める。
スリランカ (75分)	気候変動の解決のための 責任あるライフスタイル	Nishani Moragoda Chamila Priyadarshani	現代社会において、人間のライフスタイルが環境に与える影響や、気候変動という悪影響を軽減できるような生活をすることによって環境に優しい変化をもたらす方法を伝える。
タンザニア (75分)	地球市民の責任	Erick Crispin Nyoni	参加者に地球市民の意味を理解してもらう。私たちが直面しているグローバルな課題について批判的に考え、すべてのPYの可能性を引き出し、グローバルな問題の解決に貢献できるようにする。
UAE (75分)	フォーミュラ1の世界	Mohamed Al Shateri	プロとしてボランティア活動に携わることや、フォーミュラ1のボランティアがどのようにモータースポーツの安全性を守っているか様々な観点を紹介する。これらは全て参加者の自己成長を促すチームビルディングのワークショップに組み込まれ、社会の発展に反映される。
UAE (75分)	成功のための人生計画	Mohammad Al Jasmi	パーソナル・プランニングの基本的なステップについて学ぶ。生涯の目標と年間の目標をどのように分けて当てはめるか、また、自分の望むものに達するためにどのように問題を克服するかを学ぶ。

目標は達成できたか	感想
できた。成功事例や事後活動を通じてこの事例に取り組みめることを伝えた。PYにとっては地球憲章の知識とその原則との長期的な関係をいかすという新たな扉を開くことになり、地球憲章の知識を確実なものにできるだろう。	セミナーの様々な場面において、参加者の視点について学ぶことができた。それにより、これまで普遍的な概念について一つの見方しかできなかったことが、異なる見方もできるようになった。
できなかったところもある。ドキュメンタリー全てを見る時間がなかったので、参加者には前半しか見てもらえなかった。	国を問わず、状況を甘んじて受け入れることをいとわない人が大勢いることを知った。参加者はビデオを全て見ることはできなかったが、非常に好意的なフィードバックをいくつかもらった。現状を理解し、この状況について、よく知ることができたとのことだった。
できた。主に、参加者はこれまでとは異なる考え方をすること、取り組みたいと思うプロジェクトについてもっと創造性を発揮しようという気持ちになったと話していた。	更に魅力的なプレゼンテーションをするために何ができるかよく理解できた。また、様々な国の関連する事例について話を聞き、ためになった。聴衆は一層革新的な考え方をしようになり、世界を冒険し、独創的な方法で課題に取り組む意欲がわいたと思う。
できた。全員がパネリストの話の様々な部分に意義を見出すことができた。ついで、学んだことを小グループでのアクティビティにいかせた。	多様なパネリストであったが、類似した特性を持っていることについて、聴衆はより実践的な理解を得られた。
できた。レクチャー形式のセミナーではなく、実践的なワークショップを実施したので、参加者すべてが自分の隠された音楽的才能を探り、新たな作曲ができた。	音楽と文化は現代社会にとって非常に重要であることを理解できた。参加者は自分たちの作曲のスキルに自信を持った。歌ったり、楽器を演奏したり、リズムを取ったりするのに特別な教育はいらないことが分かった。音と音楽がどのように人々を結び付けるのかを実際に見ることができた。
できた。参加者がやって来て、感じたことや体験を共有したことにお礼を言ってくれた。今回のPYセミナーは特にJPYのために実施したかったが、参加したのは2名だけだった。	JPYと一緒にPYセミナーを実施する経験ができた。聴衆はスポーツ・ボランティアとして活動したり、ロシアのスポーツ・ボランティアの動向、オリンピックや他の国際的なスポーツ・イベントについてもっと知りたいと思うようになった。
できた。私のゴールは達成できた。聴衆に質問をするときちゃんと答えが返ってきた。内容を理解してもらい、最終的にはビジョン、使命、目標を立てることができた。主催者として、参加者に意識を高め、それぞれの目標への意欲を高めてもらいたいと思っていたが、実現させることができた。	参加者は素晴らしいビジョンや目標を立てていたため、彼らから多くを学んだ。ビジネスから人生まで、どんな意味があるのか合理的に考えられた。さらに、自分自身のコミュニケーション能力を磨くことができた。参加者には戦略的マネジメントについてよく知ってもらえたと思う。
できた。ゴールは100%達成できたと思う。この分野について関心があり、かなり知識のあるおよそ50名のPYが参加した。十分な知識を持っている人と、これから学びたいと思っている人双方にとってためになるセミナーができたと思う。	情報を収集し、批判的に分析することによってこの分野への知識を深めることができた。また、セミナーの準備を通して、様々な意見や背景を持つ国際的なグループに対してどのように話すべきかが分かった。パブリック・スピーキング、コミュニケーション、時間管理のスキルを伸ばす機会にもなった。聴衆は気候変動の基本的な知識を得られたと思う。
できた。セミナーに参加したPYそれぞれがディスカッションに効果的に取り組んでいたため、ゴールは達成できた。	a.考えや概念をグループに伝える能力が向上した。 b.グループのファシリテーション能力が向上した。参加グループは地球規模の課題について考え、グローバルな枠組みの中で自分たちの行動や考え方を振り返り「アイデンティティ」の影響を理解した。
できた。PYはチーム・ビルディング・ゲームを通じてセミナーの目標を自分のものにできた。ゲームには、間接的ではあるが、より積極的な参加を促す楽しい内容が含まれていた。フォーミュラについてもっと知りたいという好奇心から、多くのディスカッションが行われ、参加者はそれぞれの状況を現実世界で直面する課題に結び付けたり、フォーミュラ1の問題解決法を使ってどのように問題を克服するかを話し合ったりした。	参加者がセミナーの雰囲気ですぐに溶け込んだことに感心した。また、参加者が交流したり、実際の生活をフォーミュラ1のライフスタイルに結びつけ、それがいかに効果的なのかを見てすばらしいと思った。これこそセミナーの主な目的だった。
できた。JPYとOPY双方から好意的なフィードバックがあった。このセミナーは参加者がそれぞれの人生について考えるきっかけになった。	全体的にセミナーは順調に進んだと思う。時間管理もでき、アクティビティと知識提供のバランスを保つこともできた。参加者は、自分自身や人生についてより深く知ることができたと思う。人生を成功へと導くことを願っている。

事後活動セッション

ねらい

- 平成27年度次世代グローバルリーダー事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」参加青年（以下、PY）が内閣府の実施する青年国際交流事業、IYEO及びSWYAAについて理解を深められるようセッション及び自主活動に取り組む。
- 事業終了後、IYEOやSWYAA等を通じて、様々な社会貢献活動にどのように組めばよいかをPYに伝えるために、日本及び外国の「世界青年の船」ex-PYがこれまで行っている事後活動の事例を紹介する。
- SWYAAのネットワークやex-PYが所属する団体（NPO団体等）を活用・連携し、充実した活動に発展させていくことの重要性を伝える。
- PYが事業後に、陸上、船内で学んできたことをいかして自国で何ができるかを考え、具体化するための活動案を作成し、ほかの参加者と共有するためのサポートをする。
- Ex-PY及びIYEOの代表として、PYと事後活動についての意見交換を行うとともに、PYの船内活動についてのアドバイス等を行う。

活動内容

日本青年国際交流機構（以下、「IYEO」）の事後活動派遣代表者の3名が、事業終了後の「世界青年の船」事後活動組織（以下、「SWYAA」）での活動の説明及び国内や世界各国の事業ex-PYとのネットワークづくりについて説明するためにシンガポールから東京間に

乗船し、事後活動セッションを2月23日（火）及び24日（水）に開催した。事後活動セッション以外の時間には、船内で「世界青年の船」事業や「世界青年の船」事後活動を紹介するインフォメーション・デスクを設置し、PYと直に意見交換や情報提供を行った。

各グループの活動案（一部抜粋）

活動名	活動内容
ロシア青年の電車 (RUSWY Train)	Train for World Youth: ex-PYとロシアを電車で横断する。ボランティア活動、文化活動を通して、ロシアの文化を広める。
Socially Environmental Achieve Town (SEAT)	地域の資源を最大限に活用しながら脱石油型社会へ移行していくための活動。現在タンザニアの一軒家で活動を開始している。
SWYの家 (SWY House)	日本参加青年の祖母が所有する鎌倉の家を、SWYハウスとし、JPYやOPYの活動拠点とする。
国連SWY (United Nation SWY)	国際連合の仕事に関連するSWYのプラットフォームを作る。イベントの開催、職員のインタビュー記事など。
SWY PRチーム (SWY PR team)	日本国内でプログラムの広報をする。所属の大学で報告会などをした場合の情報を集約するなど。現在webプラットフォーム作成中。

これから取り組みたい活動（アンケートより抜粋）

新しい外国語を学ぶことや、国際的なボランティア交流に参加することなどを、個人的な目標にした。

SWY教育ネットワークを作って、教員同士をつなげ、教材などを共有する。次期以降のJPYとつながり、コミュニケーション力の向上の手伝いをするなど。

日本の視覚障がい者や聴覚障がい者の学校を訪問し、スリランカで訪問した学校のことを伝えることで、役に立てると思う。

私の通っている大学でセミナーを開き、環境問題について人々の意識を向上させ、何ができるのかを知ってもらう。木を植える習慣を自分自身で身に付け、更に友人にも広げる。そして自分の住んでいる町で、トラジションタウン関連の取組をしたい。

SWYAAの活動に参加し、自国でのボランティア活動を増やすことで、社会に貢献したい。

SWYのメンバーと様々な活動を通して交流を保つとともに、自分の住んでいる町やコミュニティでの社会問題にも取り組む。

SWY28のメンバーや、SWYに関わった人々が集える場所を作りたいと思い、SWY Houseを計画している。日本へ来たOPYや、関東から遠いエリアに住んでいるJPYが関東へ来たときに泊まれる拠点や、セミナーやイベントの開催のための場所にしたり、ゆくゆくは持続可能な生活を実際に行っていくための場所にしたいと思う。

4年後の東京オリンピックでボランティアをしたい。目が見えない人や耳が聞こえない人に関するボランティア活動をしたい。オリンピックに向けて、スポーツボランティアの認識を高めていきたい。

SWYの良いところはこのプログラムを船内だけで終わらせないことだと思う。既にex-PYが様々なプログラムやイベントを実施しているが、私たちSWY28でも何か作り出し、継続していきたい。